



登山 月報

JMSCA

登山月報 第643号 令和4年10月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）



エベレスト南西壁の大中央ガリー



No.643

I F S C クライミングワールドカップ 2022 年シーズン 総括	2
2022 山岳レスキュー講習会(無雪期・西部地区) 報告	4
第 158 回 Mountain World	6
長崎県山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員会の SDGs な活動	7
第 19 回山岳遭難事故調査報告書 その 2	8
Enjoy Climbing	11
JMSCA、表紙のことば、編集後記	12

IFSCクライミングワールドカップ 2022年シーズン 総括

スポーツクライミング日本代表ヘッドコーチ 安井博志

2022年シーズンが最終戦のインドネシア・ジャカルタ大会をもって幕を閉じた。今シーズンはほぼすべての大会で日本選手達が活躍し、素晴らしいシーズンとなった。また昨年よりも新型コロナ対策は各国が緩和傾向にあったため多くの観客の中で競技でき、大会へ活気が戻ってきたことは嬉しかった。

さて、素晴らしい成績と記憶に残るパフォーマンスを挙げるときりがないが、特筆すべき事を以下に幾つか挙げる。

- ボルダリングワールドカップ・男子個人年間ランキング 日本人選手が表彰台独占（優勝：緒方良行2位榎崎智亜、3位藤井快）
- ボルダリングワールドカップ・女子個人年間ランキング 野中生萌選手 2位
- ボルダリングワールドカップ・国別年間ランキング 8年連続1位（2014年より、2020年は除外）

- リードワールドカップ・ヴィラル大会 本間大晴選手初優勝&男子個人年間ランキング2位
- リードワールドカップ・コペル／エディンバラ大会 森秋彩選手初優勝&二連勝
- リードワールドカップ・ジャカルタ大会 百合草碧皇選手初優勝
- リードワールドカップ・国別ランキング1位

来シーズンはいよいよパリオリンピックの予選が始まる重要なシーズンとなります。各選手がオリンピックや自身の目標に向かってさらにレベルアップしてシーズンに臨むと思います。これからも日本代表チームは歩みを止めず前へ進められる活動を継続していきたいと思います。これも選手達をサポートしてくださっている皆様のご支援があつてこそです。本当にありがとうございました。

成 績

IFSCクライミングワールドカップ2022 国別ランキング

ボルダリング	リード	スピード
1位 日本 (20783)	1位 日本 (21355)	1位 インドネシア (15347)
2位 アメリカ (15223)	2位 スロベニア (18273)	2位 ポーランド (15203)
3位 フランス (10175)	3位 アメリカ (16598)	3位 中国 (12940)
		8位 日本 (5273)

IFSCクライミングワールドカップ個人年間ランキング一覧（日本人選手のみ）

ボルダリング				リード				スピード			
男子		女子		男子		女子		男子		女子	
順位	氏名	順位	氏名	順位	氏名	順位	氏名	順位	氏名	順位	氏名
1位	緒方 良行	2位	野中 生萌	2位	本間 大晴	6位	谷井 菜月	26位	大政 涼	22位	林 かりん
2位	榎崎 智亜	4位	伊藤ふたば	4位	百合草碧皇	8位	中川 瑠	34位	池田 雄大	26位	河上 史佳
3位	藤井 快	19位	青柳 未愛	7位	吉田 智音	11位	森 秋彩	38位	藤野 柊斗	36位	竹内 亜衣
10位	川又 玲瑛	20位	倉 菜々子	9位	緒方 良行	17位	大田 理崇	48位	安川 潤	38位	林奈 津美
14位	土肥 圭太	22位	松藤 藍夢	10位	樋口 純裕	18位	伊藤ふたば	51位	三田 歩夢	54位	金谷 春佳
16位	高田 知堯	28位	菊地 咲希	22位	西田 秀聖	22位	小武 芽生	53位	梶 晃悠	59位	相原麻奈美
17位	井上 祐二	33位	大河内芹香	32位	藤井 快	27位	小池 はな	54位	竹田 創	73位	多月萌々菜
19位	榎崎 明智					30位	柿崎 未羽	55位	北見 宗和		
30位	山口 賢人					49位	阿部 桃子				
36位	吉田 智音										
55位	石松 大成										

ボルダリング年間女子個人2位・野中生萌



ボルダリング年間男子個人
(左から2位・榎崎、1位・緒方、3位・藤井)



リードワールドカップ ヴィラルール大会 WC 初優勝
及びリード年間男子個人2位・本間大晴



リードワールドカップ コペル大会 WC 初優勝・
森秋彩



リードワールドカップ ジャカルタ大会 WC 初優勝・
百合草碧皇





2022年9月9日(金)～11日(日)に富山県立山町の独立行政法人日本スポーツ振興センター・国立登山研修所にて、山岳レスキュー講習会(無雪期・西部地区)を開催した。講習初日は前日夜の雨の影響がやや残ったものの、講習期間を通じておおむね安定した天気で、涼しく講習に適した天気となった。

無雪期の山岳レスキュー講習会は、新型コロナ禍で3年ぶりの開催であった。まだ新型コロナの影響もあって施設の宿泊定員の設定もあり募集定員を絞っての開催としたが、募集期間が新型コロナ第7波の真っ只中であったためか応募者が募集定員に達しないクラスもあったり、直前で感染等の影響でのキャンセルもあったりして、受講生は少なかった。

講習会参加者数は、クラス1(受講生2名)、クラス2(受講生10名)、クラス3(4名)、講師・スタッフ等(17名)の計33名となった。



クラス1は登山医科学委員会の角田医師を迎えて山での生理学、ファーストエイド、一般登山道での搬送等を講習した。講習に際しては室内での実習や受講生間の接触もあるため、登山医科学委員会の監修の元でゴム手袋着用や都度消毒などの感染対策を徹底して講習を行った。1対1以上の講師陣、特に現役医師によるファーストエイド等の指導によって充実した講習が行えた。傷病者搬送の実習はクラス1の受講生だけでは人数が足りないため、一部はクラス2と合同で実習を行った。



クラス2は、岩場でのセルフレスキューをテーマにし、ロープクライミングでリードしている人が負傷して動けなくなったことを想定したリーダーレスキューを題材とした。はじめて岩場のレスキューを学ぶ方もいる前提で個々の技術から指導を行い、三日間でリーダーレスキューを一通りこなせるように講習を行った。



クラス3は、ある程度のレスキュー技術を習得している方を対象に、リーダーレスキューや他パーティーのレスキューなど種々の設定で講習を行った。

夜は、新型コロナ対策のための飲酒制限や懇親会の中止もあって、夕食後も講習内容の補習。復習に励むクラスもあり充実した三日間となった。

感想(クラス1・愛知県 畔柳健二)

高一の夏山合宿(白根三山縦走)で初めて見た御来光と雲海に感激して生涯スポーツとなった登山。今年7月の幌尻岳登頂で百名山完登後、ネットで本講習の記事を偶然発見し、オープン参加だったので自分のスキルアップ目的で申込んだ。クラス1は受講者2名・講師3名で、座学+実践の非常に高密度の講習を受講できた。実際の登山中に遭難現場に遭遇した時に今回の講習を活かせるよう、今後も時々内容を振り返り訓練していくことが重要と実感した。3日間ありがとうございました。



感想(クラス2・広島県 松本正和)

この度、リーダーレスキュー技術の習得を目的として、JMSCAの山岳レスキュー講習会(無雪期)のクラス2を国立登山研修所において受講させていただきました。

最初はぎこちなかったロープ捌きも、3日間の集中的かつ効率的な練習と分かりやすい指導により、最終日には多少は見られる形になったのではないかと思います。

また、今回は夜の屋内人工壁での補講だけでなく、クラス1との合同演習として搬送の実演や実際のヘリによる救助動画の閲覧など、大変内容の濃い3日間となりました。

講師の方も仰っていましたが、技術はすぐに忘れてしまうため、身体で覚えられるよう定期的に復習していきたいと思っています。

今回講習会でお世話になりましたスタッフの皆様に本当に感謝したいと思います。

どうもありがとうございました。



感想(クラス3・茨城県 堀 香奈)

私は今回、山岳レスキュー技術の再確認とブラッシュアップ目的に講習会に参加させていただきました。1日目はリーダーレスキュー、2日目はセカンド・チームレスキュー、3日目にコンパニオンレスキューという流れでの講習でした。3日目の複数ピッチルートでの事故を想定したシミュレーションでは、トップ・ビレイヤー・救助者・要救助者の役を交代し、全体の流れをイメージしながら実践することが出来ました。自己学習時間もあり、システムの理解ができるまで講師の先生方に確認出来たので、次に繋げることが出来ました。そして、今回人生初めてテンションのかかったロープをナイフで切断しました。いとも簡単にロープが切断されたのが恐怖であり、ロープの取り扱いには十分注意していこうと改めて確認できたのも貴重な経験でした。自分の未熟な部分、焦ると起こしてしまうミスなどが自覚でき今後の課題も明確になりました。

「シンプル、安全、迅速に」そして、お互いの声かけ、要救助者への声かけも忘れずに心がけていきたいです。まずは、レスキュー技術を使うような状況にならないよう、自分自身が安全に登ることが一番ですが、何かあった時に自分そして仲間を守るように今後も継続してブラッシュアップしていきたいです。

講習会では感染対策・安全対策も徹底されており、集中して講習会に臨むことが出来ました。3日間どうもありがとうございました。

海外登山懇談会 2022 開催のお知らせ

JMSCA国際アルパインクライミング委員会

「SAWA」新たなフィールドに可能性を求めて

佐藤 裕介「ヒマラヤの沢の可能性を探る旅」

成瀬 陽一「沢登りの地平線～世界における沢登りの可能性」

【座談会】 佐藤裕介+成瀬陽一+岩崎洋

【日 時】2022年11月16日(水) 19:00開演(18:30開場 途中入場可) ※多少時間が前後する可能性があります

【会 場】すみだ産業会館 ※JR錦糸町南口駅前 丸井錦糸町店8階

【資料代】500円

【定 員】60名以内

【申込み】期限2022年11月14日(月) ※当日受付可です。但し、コロナ対策のためなるべく事前予約をお願いします。

【会場入場申し込み】

【試験的にzoom配信をいたします(無料、資料無し)下記よりお申し込み下さい】



<https://forms.gle/ztXNnQ3qNasvXydg9>



<https://forms.gle/MKy5EkfnX7fqgQFa9>

第158回 Mountain World

マナスルの最高点は？ ピークハンター困惑

池田常道

秋の登山シーズンが始まったばかりだが、今季はマナスル(8163 m)に登山者が殺到している。この山はもともと、チベット側のチョー・オユー(8188 m)と並んで「登りやすい8000 m峰」として秋に人気が高まる傾向があったが、今回はもうひとつ特殊事情が加わった。

それは昨年12月号、この連載の第152回に書いたマナスルの頂上問題だ。ブロード・ピーク主峰と前衛峰、アンナプルナやダウラギリの最高点等々、8000 m峰の頂上を取り違えた事例は枚挙に暇ないが、公募隊が幅を利かせるようになった1980年代半ば以降は登山者本人も隊長も、ガイドもシェルパも、固定ロープを設置した雪稜の一角を頂上として扱って恥じるどころがなかった。

＊

そこから最高点までの雪稜は秋の深い積雪に覆われて、公募隊には危険だと断じてきたため、雪稜上部のコブから引き返しても登頂と認めてきたのである。過去マナスルの頂上と称する記念写真の多くが、笑みを浮かべる登山者の背景にそこより高い雪のコブが堂々と写っていても、誰もおかしいと思わなかったのだろうか。

12月号でふれたように、イマジン・ネパールのミンマ・ギャルジェは最後の頂稜部分に固定ロープを張って最高点を陥れ、その模様はジャクソン・グローブズ(豪)の飛ばしたドローンで上空から撮影され、ミンマ自身も最高点からビデオを撮った。

＊

ネパール当局から外国人登山者に対して発給された今季の許可数は、9月20日までの時点で404に及び、さらに増えることが予測された。公募隊の側も、本当の頂上へ再挑戦させるという理由で、新たなマナスル挑戦を売り込んだ。シェルパたちも、今回ばかりは最高点までルートを開いて期待に応えた。

ところが、モンスーン明けが遅れたこの秋の天候は落ち着かず、マナスルでは雪崩が頻発、当初期待されたエヴェレスト並みの登頂者数700越えは絵に描いた餅に終わった。

10月2日には大雪崩がBCを襲い、2名が死亡、ス

キー滑降に挑んでいた米国女性ヒラリー・ネルソンは雪崩とは別にクレバス転落事故で亡くなった。

セブンサミット・トレックス、8Kエクスペディションズなどの大規模公募隊はマナスルを早めに片付けて次の目標——ダウラギリ、アマ・ダブラム、チョー・オユーなどに取りかかる都合もあって、条件の良くないマナスルに固執することなく撤収を決めた。

チョー・オユーは、チベット側の西稜通常ルートが使えなくなったので、ネパール側に公募隊向きの別ルートを拓こうと昨年冬にミンマ・ドルチがシェルパ10人のチームを編成して挑んだもので、ターメの奥から南南西稜に取付いて7600 m付近まで達するもの。距離は長い、クライアントを伴っても登れるという。10月から11月を予定しているが、マナスルでの遅れがどう影響するか。

すべてのマナスル経験者があえて再挑戦に踏み切ったわけではないが、8000 m 14座を目ざす人々にとっては捨て置けない事態になった。とりわけ若いシェルパにとって、14座完登は商売上の勲章になり得るのだから。ニマ・ギャルツェンは今季再びマナスル最高点へ向かったが、不成功に終わった。ミンマ・デビッドは2019年にニルマル・プルジャと60 m足らずを残して逃したダウラギリの最高点に再挑戦する(プルジャは昨年成功している)。

エバーハルト・ユルガルスキー(独)の8000ers.comの調査によると、マナスル以外にも疑わしい巨峰があるという。彼とそのチームはここ10年来、多くの登頂者から写真の提供を受けて、撮影された場所が山上のどのあたりなのか、仔細に比較検討を重ねてきた。

故エリザベス・ホウリー女史が続けてきたヒマラヤン・データベースでも、2022年度以降の記録については、今回の結論を採用すると述べている。



マナスルの第2キャンプを目ざす登山者の列
撮影＝Tsering Ghale Sherpa

長崎県山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員会のSDGsな活動

令和4年、当県岳連は加盟11団体でスタートした。そのうちの1団体は高体連山岳部であり社会人山岳団体は10団体となっている。平成30年から脱会が始まり今年も1団体が脱会し、この4年間で6団体が離れていった。いずれも会員の高齢化と減少で活動自体ができなくなったのがその理由である。

SDGs的に考えると高齢化に見合った活動ができれば、「すべての人に健康と福祉を」に合致すると思うのだが、現実には厳しく脱会の道を選んでいる。

所属団体会員の高齢化は年々進んでおり、今後もその流れは続く可能性がある。1団体のみでの活動でなく、加盟団体が連携しながら進めていくことも今後の方向性かと思われる。

こんな中で県岳連組織の山岳レスキュー研究会や遭難対策委員会では、加盟団体の枠を超えて個人での参加も積極的に促し、メーリングリストへの登録で連絡を密にして活動をしている。残念なことにコロナ禍で今は活動が停滞している。

前置きが随分と長くなったが、自然保護委員会の活動も役員選任段階から苦勞しているのが現状である。では活動はどうしているか。

平成29年4月から所属団体から1名を自然保護指導員として任命し、JMSCAが示す指導員としての活動が期待されている。

環境月間の6月には所属団体独自での登山道の清掃活動を促し、佐世保地区、諫早地区では行事の定例化を図っている。また、長崎市内の加盟3団体にとっては「長崎市山岳連盟」が組織化され、長年にわたって年2回の九州自然歩道の除草作業や3ヶ月毎の歩道パトロールに取り組んでおり、SDGsな活動に尽力して

いる。

一方遭難対策委員会も、ここ数年の大きな自然災害により被害を被った多くの登山道の整備（倒木伐採・道案内テープ設置・ロープ設置等）に追われている。

登山道被害は、山岳遭難、道迷いに直結しており、消防・警察と連携した救助支援活動も多くなっている。これらの活動も会員の高齢化、人手不足（同じ人が毎回ボランティアに参加）、また登山道整備のための資機材を整える資金不足などが課題となっている。

祝日「山の日」一斉登山も今年で5回目となり、ゴミ袋を配布し登山道清掃を行っている。また、『少年少女登山教室』（地図を読んで山を登ろう）を開催しており、一義的には遭難予防であるが、山登りの楽しさの中で自然保護への理解も深まると考えている。

いろいろ記述したが、こうした活動は自然保護委員会の枠を越え、また地域を越えた連携が必要となっている。

（長崎県山岳・SC連盟会長 古川好幸）





3. 登山団塊の減少が引き起こす山岳団体の大変化

日本の登山界を長い間牽引してきた登山団塊世代が高齢化し、今後の5年程度で急速に輝きを失い、減少する。しかし、図7～8のピークが示すようにあまりにも人数が多い。新たな世代へ、ピークを移し、世代交代するには、組織構成上大きなリスクを伴う。登山団塊会員の減少の影響は、そのリスクの一端であろう。

個人会員制度の導入など、様々な方向へ新組織活動の模索が続いているが、2団体共に次の牽引世代を見いだせない状態が続いている。

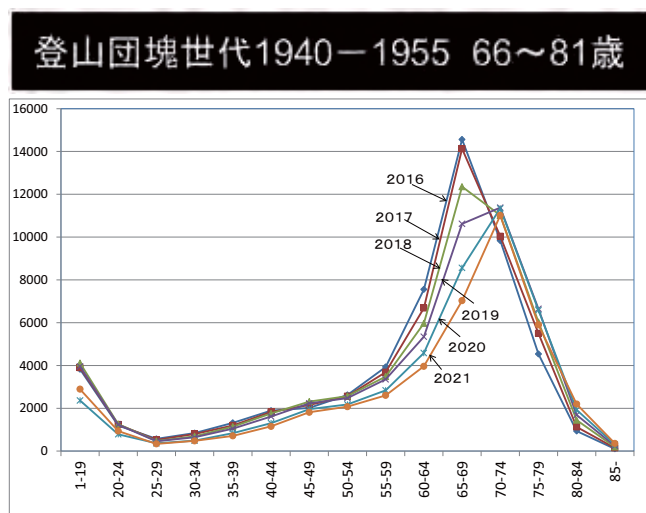


図7 JMSCA会員の経年変化

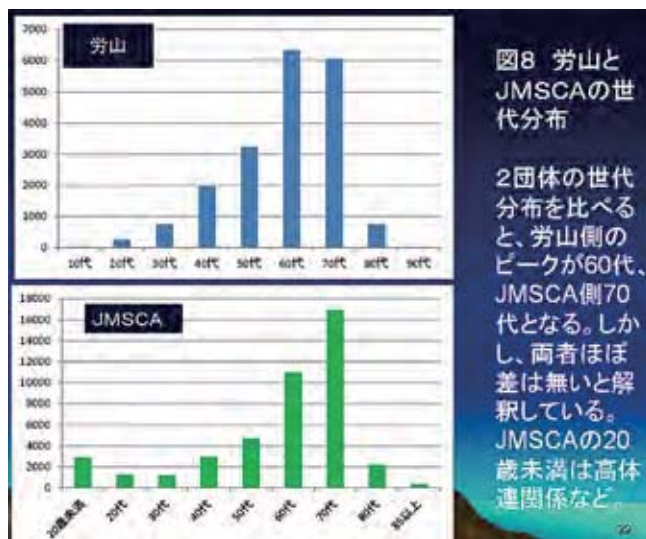


図8 労山とJMSCAの世代分布

2団体の世代分布を比べると、労山側のピークが60代、JMSCA側70代となる。しかし、両者ほぼ差は無いと解釈している。JMSCAの20歳未満は高体連関係など。

レジャー白書から見た登山活動

レジャー白書は、1979年より15歳以上男女約3000人を対象に、アンケートの訪問留置法で調査し、その後、2009年よりインターネット調査に切り替わった。

登山人口の推定には、主に、ここでの調査結果が使用される。

なお、レジャー白書は10月に発刊されるため、「最新刊2021」は、コロナの影響を最も受けた2020年データとなる。

登山人口は図9から明らかなように、初めて登山者人口が500万人を切り460万人となった。

この結果、「余暇活動の参加率上位10種」表にも長年8位あたりで「登山」項目が顔を出していたが、2020年に10種から消滅した。一般の人々には登山への関心が薄れたことになるが、図10に見られるように、継続する人々は、登山回数の変化はなく、意欲は変わらない。2021年の事故データが再増加に転じていることから、コロナの影響が薄まると、ある程度は回復するかもしれない。

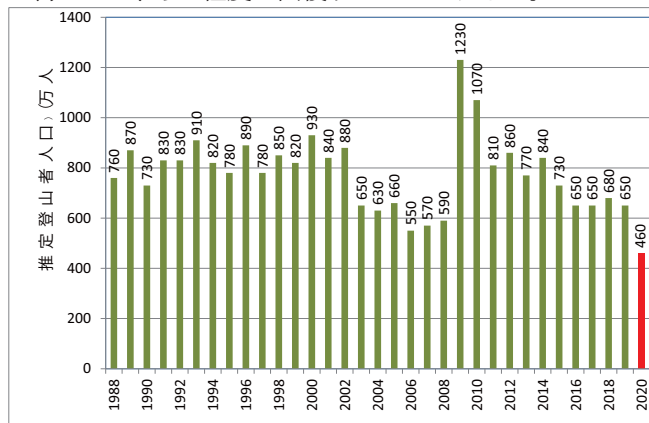


図9 推定登山人口の経年変化

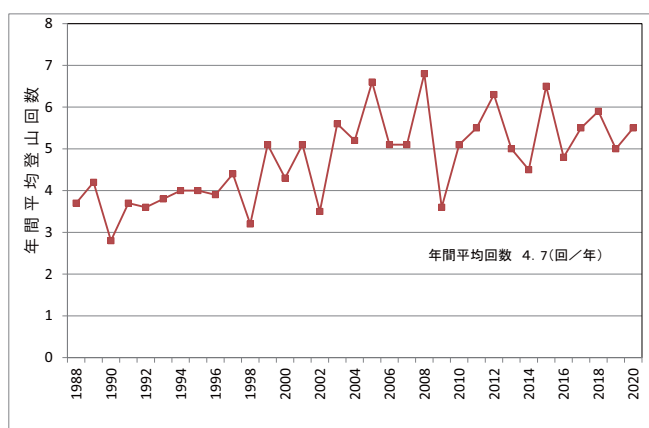


図10 年間登山回数

2021年警察庁の事故データ

本データは、毎年6月に公表される警察庁の事故統計を基に、再分析後・データ加工したものである。なお、警察庁では2021年1月から12月までの調査結果としている。

1. 2021 年山岳遭難事故の傾向

2021 年の事故統計では、遭難件数 2635 件、遭難者数 3075 人となり、対前年度より 378 人ほど再び増加傾向を示した(図 12)。その結果、コロナ以前の 2019 年に近づいた。2021 年にはコロナの第 4 波、5 波が含まれるだけに、コロナ下にあつての登山活動が盛り返してきたと推定される。

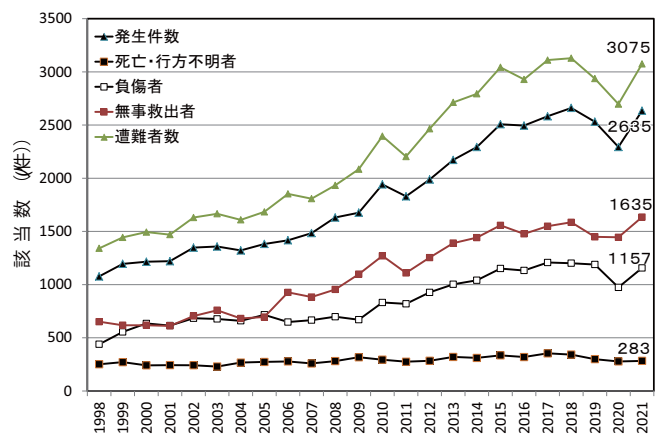
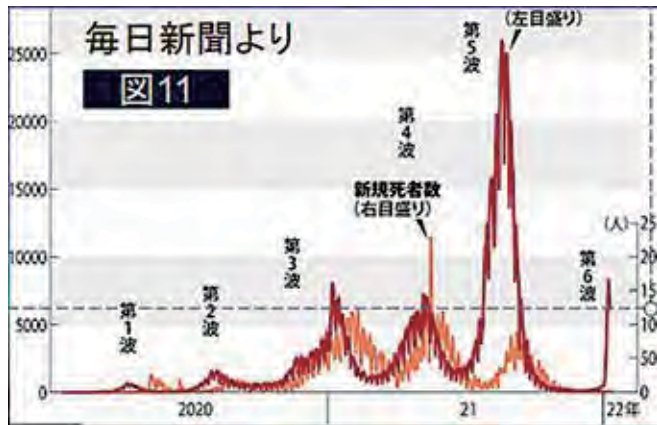


図 12 2021 年の山岳遭難事故発生状況

2. 事故者の年齢分布

図 14 の 70 歳以上の曲線が示すように、2020 年まではコロナ下にあつても高齢者の割合が増加し続けてきたが、初めて減少の傾向を示した。

もう少し経年変化を見る必要があるが、60 歳世代の変化曲線を参考にすると高齢者の増加傾向が止まり、一定期間に入った可能性がある。

以上の結果、2021 年の事故者の年齢分布として、図 13 が得られた。前年度と比べると、世代間の差が少なくなっている。

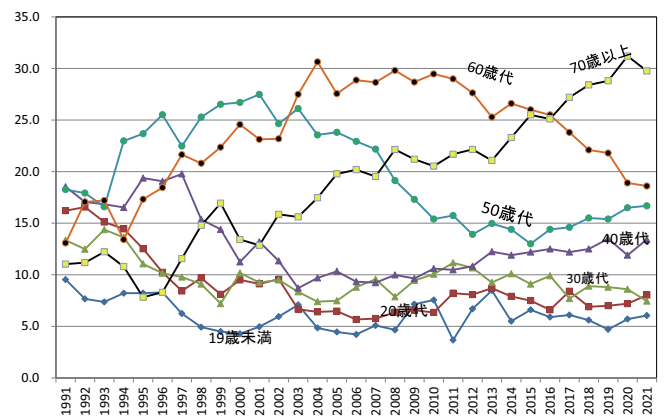
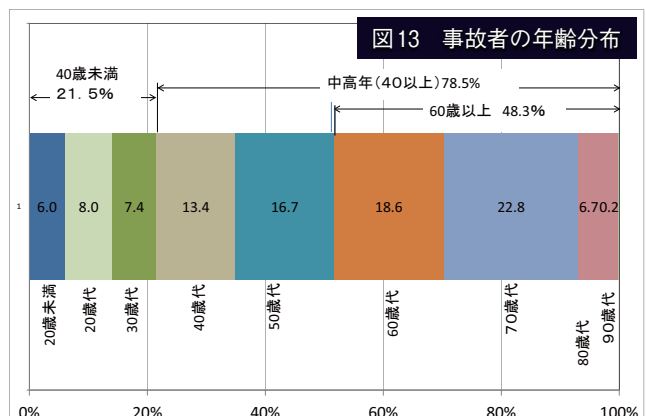


図 14 各世代別経年変化

3. 登山目的

登山目的の経年変化を表 2 に見ると、2021 年(R3)の遭難者数の増加を反映して、「登山」での事故が 314 人と急増している。

また、コロナの影響がなかった 2018(H30)に比べると、「登山」は少し減る一方、「ハイキング」も増加や「観光」の減少が目立つ。登山形態の変化を示すバロメータとなっている。

		コロナ前	前年		前年度差	コロナ前比較
		平成30年	令和2年	令和3年	R3-R2	R3-H30
登山系	登山	2022	1681	1995	314	-27
	ハイキング	161	233	260	27	99
	スキー登山	54	43	48	5	-6
	沢登り	47	42	50	8	3
	岩登り	31	39	42	3	11
非登山系	山菜採り	385	381	346	-35	-39
	溪流つり	25	40	37	-3	12
	作業	43	38	46	8	3
	観光	141	33	49	16	-92
	写真撮影	23	13	23	10	0
	山岳信仰	4	4	6	2	2
	自然観賞	13	22	18	-4	5
	狩猟	5	6	13	7	8
	その他	175	122	142	20	-33
	遭難者数	3129	2697	3075	378	-54

表 2 登山事故者の目的別発生状況と経年比較

4. 登山事故態様

図 15 に見られるように、登山事故総数が変化しても、事故態様の割合は殆ど変わらない。

2021 年の道迷いは 41.5%であった。2020 年の最高値 44%よりは低い、道迷い者数は 1277 人となり、過去最高値を示した。

登山事故のイメージ代表である雪崩は 0.4%にすぎない。動物・昆虫の襲撃(項目名;熊)は年による差があり、2021 は 27 人であった。

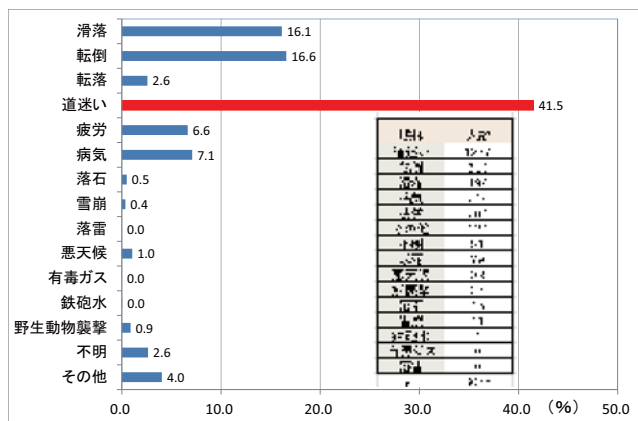


図15 事故態様

5. 県別に見た、2020、2021年における前年度比較

県別に、2年間にわたる前年度比較をおこなった結果を表3に示す。

2021年と2020年における変化を左右に比べた結果、2年間で、山岳県を中心に大きな変化が生じていることが明かである。その代表が長野県で、2020年では82人減少、2021年ではコロナでの減少を取り返すように74人増加している。このような関係が黄色矢印に表れている。

一方、2020年で増加トップの神奈川県は、大幅に減少している。



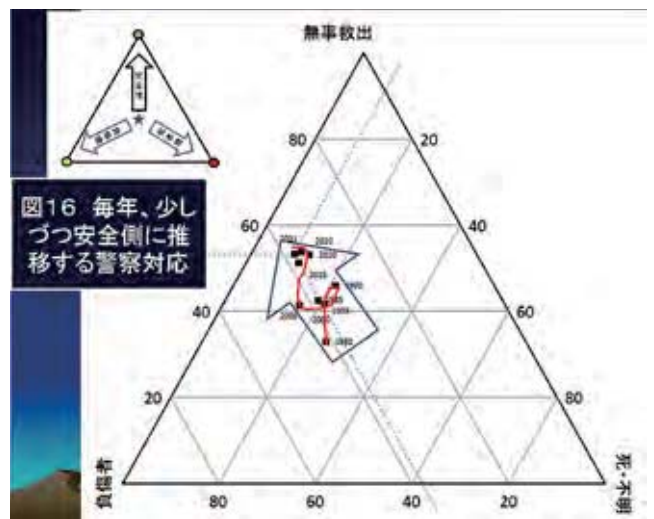
表3 増加県と減少県の逆転

6. 全国的な安全登山への取り組み効果

警察統計で、重要なチェックポイントは、遭難事故に占める「無事救出」がどの程度占めるかにある。例え、事故総数が減っても、死亡が増えては評価が半減する。

「無事救出」の多くは「道迷い」が占める。山での道迷いは生死に関わるため、傷も負わずに救出されるのだから大きく評価されなければならない。

三角グラフ(図16)の経年軌跡は、死者割合を増加させずに、安全側に推移しているのが、評価されるべきであらう。



6. 登山形態から生じる県別事故の特徴

死亡・行方不明、負傷、無事救出の3変数で三角グラフに描くと、ある程度、山岳事故の発生状況が類似した県が集まる(図17)。

死亡率20%以下に細長く分布し、無事救出の程度に応じて、30%付近より山岳県、60%付近の都市近郷県、さらに、大きくなると一般県と推移していく。この分布差はアルパイン型の転倒・滑落の負傷が多い県から道迷いが多い県への推移によるものである。

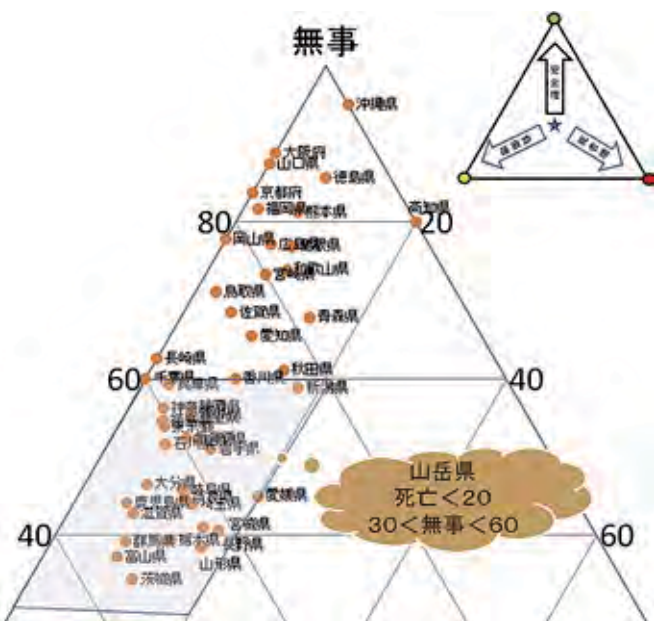


図17 県別事故の特徴

2022.3.31-4.16 Jumula~Mugu~Humla

ヒマラヤの沢の可能性を探る旅

佐藤裕介

後半は今回のネパールのメイン的な山行である。10年前に岩崎さんがトレッキング中に撮影した「ゴルジュから最後がスッキリした壁」という場所を特定し、沢を偵察するというのが目標だ。

4月8日 6:30 ガムガディ発(ジープ) / 8:30 - 9:00
村 2,750 m / 峠手前高差 100 m 下 ナマステ
SIM OK 峠はダメ、以降 Limi まで不通 / 3:
00 峠 3,570 m / 17:30 宿 2,700 m

ガムガディから前回の写真を撮ったと思われるダルマ付近までジープで入れるとのこと。岩崎さんは信じられんと嘆いている。開発が進みトレッキングとしての面白味は薄れてしまったが現地生活を考えると仕方ないことだ。

ダルマまで2万ルピー（1ルピー＝約1円）。峠手前までなら5,000ルピーだったので峠手前まで頼むことにして早朝ジープに乗り込む。峠手前の村までジープでも2時間強掛かり、歩くのは今回の日程では厳しい道だった。峠手前の村(2750m)でジープを降りてラーメンを作ってもらい、腹を満たして出発。小学生達も下の村へ通学していった。

ここから3570mの峠までは標高差800m。ジープ道と別れトレッキング道を登って行く。峠までに数軒と峠自体にも何軒かの家があった。

峠からは基本下り基調でダルマ方面に行くはずだが車道をショートカットしながら下った後、ダラダラと登り返す。「なんで登りなんだよ～」と岩崎さんの嘆きを聞きながら進むと道路工事事務所があった。ここからはまた下っていく。事務所の設置をここにしかったから道が登っていたようだ。

どんどんと下っていくと一軒ぽつりと立つ家があり時間も夕方になってきたが、目的の壁に近づくべく今日も日暮れ近くまで頑張り2700m地点の家で一泊。

調子よくロキシーやバーボンを飲んでしまい撃沈。美味しいダルバートを全て大地に戻す。食事を用意してくれた家の方に本当に申し訳ない。ゲロを吐きまくり、ヨレヨレになりながらも明日は勝負所だ。お茶無しで6時に出ましようと思いきや宣言し寝る。

4月9日 6:05 宿発 / 8:30 - 10:00 Limi / 12:30 -
1300 2300 m 出合 / 14:45 - 1450 ゴルジュ出
合 - 偵察 1540 / 17:30 2300 m 出合

今日はあの壁を見られるはずだ。気合いが入る。暗いうちから起き出し6時に出発。

昨夜のゲロを横目に見ながら快調に歩き出した。Limiまでは下り気味のトラバース、村手前から壁が見えだし一気にテンション上がる。写真をたくさん撮りながらLimiへ。お茶とダルバートを頂いてからいよいよ沢に向けて2人で出発した。一先ず目標は出合いへの到達と、ゴルジュの偵察。

Limi 下流の枝沢に簡単に行けるとあって旧道から下り始めたが途中で踏み跡無くなり傾斜も強くなって断念。この傾斜では旧道もここでは無かったようだ。引き返し村人が、沢に降りられると言っていた斜面に入る。ゴルジュ出合い付近を直接目指して斜面を下るのだが、かなりの傾斜で直接ゴルジュ出合方向には降りられず、上流の支流出合付近にトラバースしながら降りる。村出発から2時間半もかかってやっと本流に到達。ゴルジュ出合から1km上流に来てしまったので沢支度を整え本流を下降する。本流は思っていたよりも傾斜があり水量も豊富。本流系の迫力ある沢らしい沢であった。何度も渡渉を強いられる。気温は高い(日中15～20℃)ので耐えられるがネオプレーンソックスなしの地下足袋&ワラジでは長い遡行には耐えられそうもない。次回はネオプレーンソックスを用意しよう。

渡渉に加え大木の橋渡りも何度も出てきて少々緊張するが楽しい。初めてのヒマラヤの沢でこんな素晴らしい沢に出会えたことに心底感動した。ゴルジュ出合いまであと少しという場所でヤギ飼いの村人2人に会う。私達もびっくりだが村人はもっと驚いただろう。沢をジャブジャブ渡渉するなんてことは村人にとっては通常ありえないこと。馴れたヤギ飼いでなんとか来れる場所に外国人が突如現れたのだから驚くのも無理はない。「ここは危ないんだぞ、クマも出るんだぞ」と脅されたが仲良く写真を撮って別れた。

後半は時間重視で巻けるところは巻いて急いだつもりだったが、内容が濃過ぎてたった1kmに1時間45分もかかってしまった。上流の出合いに泊まり道具はデポしていたのでまた、戻らなければならない。明るいうちに帰るにはここまでかなという雰囲気だったが、わがまま言ってゴルジュに続く支流を独りで偵察させてもらった。出合から10分もしない内に水は伏流してほとんど流れがない部分が出てくる。15分登ったら引き返し帰ってくると言ったのに、もう少しでゴルジュになりそうだと歩みは止

まらない。予定時間をオーバーしながら、ゴルジュの入り口に到達した。意外とゴルジュ内は普通に歩いてしばらくは難なく行けそう。水流も回復している。ゴルジュの奥がどうなっているかは次回のお楽しみにして、待たせてしまっている岩崎さん目指して急ぎ下る。

寒さに震える岩崎さんと合流して、上流のデポ地を目指した。途中一気に巻いてしまおうと大高巻きに入ったが行き詰まり40mロープで2回の懸垂。デポ地直前で雨がチラつきカッパを着て進む。行きよりは時間かからずに戻って来れた。夜は雨を心配してタープをしっかりと張ったが、徐々に回復し半月に近い月をめでながら焚き火横で夜を過ごした。「焚き火にはバーボンだね」と言う岩崎さんとバーボンを舐めながら最高の夜は更けていった。



沢支度の筆者と山羊飼



目指すゴルジュと壁



令和4年度 第6回 ハイブリッド理事会議事録

○日 時：令和4年8月10日(木)

14:00～16:50

○場 所：J S O Sビル3F会議室1と
Webのハイブリッド会議

○出席者：丸会長、亀山、小日向、古賀各
副会長、小野寺専務理事、村岡、相良、
蛭田、濱田、赤尾、町田各常務理事、前田、
山本、栗田、安井笹生、小竹、水島、野村、
水村、六角、青山、小高、望月、丸山、
中橋各理事、中島、古屋、佐久間各監事

○欠席者 原、山口各理事

1. 開 会

2. 丸会長挨拶

8月5日から8月9日まで、香川県まんのう町での高校総体登山競技では、役員、委員会の皆様、ご苦勞様でした。コロナの影響がでる中、各都道府県代表の高校生の皆さんの労にも報いることができたのではないかと思います。

一方で、会長あてに、人事、組織運営について厳しい批判の声をいただいた。

1. 謙虚さが不足しており、長年、日山協に労を費やしてきた各委員会の常任委員に対しリスペクトがない。2. マーケティングに時間が費やされ、登山、アルパインクライミング組織の運営が機能していない。3. 副会長は会長をサポートできていない。4. 昭和から平成にかけて山の世界を築いてきたメンバーを理事に起用しておらず、同窓会運営と勘違いしていないか。これらのご意見に対し、会長として、47都道府県岳連やアスリートと共創者となる。出る杭は育てて伸ばす。自由闊達な意見交換をし、目標へのコミットメントをし、確認しあう。互いに尊重、協力しあって成長することができるJMSCAをめざすという決意を持っている。この考えを基に、理事の方々と共に協力し、意見交換ができることを願っている。

3. 会議成立状況報告

理事数28名中26名出席 監事数3名中3名出席(定款第33条、定足数=15名(1/2以上))

4. 議長選出

丸会長が議長を務める。(定款第32条)

5. 議事録署名人

会長及び監事(定款 第34条)

ホストは小野寺専務理事が務める。

6. 議 題

議案第1号 議事録の承認について

令和4年度第5回理事会議事録の承認について(事前送付済)

異議なく承認された。

反対0名 棄権0名 賛成25名

議案第2号 雪崩災害防止功労者表彰の推薦について

小野寺専務理事が配布資料を基に説明した。町田登山部長が候補としてあがり、服巻委員長からの推薦文と調書が紹介され、異議なく承認された。

反対0名 棄権0名 賛成25名

議案第3号 海外登山奨励金の交付について

小野寺専務理事から配布資料を基に、選考委員会の審議を経た結果、以下のように提案したいと説明があった。

チュキマゴ(6,258m) 40万円

シブリン 20万円

ユタ、クライミング開拓遠征 承認せず。

質問：シブリンに対しては、計画が甘い部分があるとのことだが、この点への対応はどうするのか。

回答：遠征隊に対しては、計画の足りない部分の指導をする予定。

質問：すでに、前月末現在「JMSCA合計で75万円支出しているが、あと60万円消費できる余力は財務的にあるのか。

回答：この支出は、令和3年度の後期海外登山奨励の承認分で、実支出の発生が令和4年になったため。今回の承認は、令和4年前期の予算分(80万円)からの支出となる。

採決をとり、以下のように異議なく承認された。

反対0名 棄権0名 賛成25名

議案第4号 JMSCA公認スポーツクライミング選手強化センター認定要項について

赤尾事務局長が配布資料を基に説明した。コメント：趣旨の文章が長い。句読点の位置や、なくせる部分を削り、簡潔にまとめ、わかりやすい表現にした方がよい。

回答：もともと、JOCの文章を基にまとめており、その内容を、そのまま使用したので冗長で、長い部分が、残ってしまっている。

コメント：当要項設定の目的は、JOCが認定するNTCの数に限りがあり(3か所まで)、今後増やしていく施設に、JMSCAとしてのステータスを与えるためのものなので、目的としてはよいと思う。ただ、JOCの趣旨と文章が大きく変わってしまうのは問題かとも思う。当内容の認定対象となる壁は、今年末くらいから完成予定。

以上の協議を経て、本案件は、趣旨の内容を損なわず、文章を簡素化しわかりやすい内容にして、次回の常務理事会に提案、審議を経て、常務理事会の決定に基づくことでよい採決を行い、以下のように承認された。

反対0名 棄権0名 賛成25名

議案第5号 講演会「雪崩から身を守るために」、講習会「雪崩サーチ&レスキューAvaSAR」の後援名義使用申請について

小野寺専務理事から、配布資料を基に説明があり、初めての団体からの後援依頼なので、皆さんの意見をうかがいたい旨の発言があった。

コメント：

講演会について：後援してもよい

講習会について：後援しないとした方がよいと考える。

その背景は、以下のとおり。当依頼元(雪崩事故防止研究会)は法人ではない。雪崩捜索時の対応方法を標準化しようという目的は同じなので、8年前にJMSCAが参加している日本雪崩捜索救助協議会で一緒にやりませんかというアプローチをしたが、独自で活動を進めたいとのことで、当依頼元とは、話が合わない状況

となっている。
受講費用について、講師がガイドなので、日本雪崩捜索救助協議会より高額で、お金の流れもよくわからないという状況である。ただ、講演会については無料で、趣旨は、JMSCAとも同じなので、講演会は後援してもよいが、講習会は後援しないという考えである。

その他意見:今まで、別々にやっていたのに、なぜ、この時期に一緒にやろうと言ってきたのか背景が不明。もう少し、話を聞いたらどうか。一部は承認するが、一部は不承認というのも、合理的でないように思う。後援名義使用申請を受けた時の承認基準はあるのか。あれば、その基準ののっとって判断し、不承認ならば、合理的な理由を付して返答するのがよいと思う。
今回は、JMSCA内で協議した結果、疑問点がいろいろでてきたので、保留という結論となったことを、事務局から、先方に伝える。その後、今後の対応は、町田常務理事が引き継ぐこととなった。

議案第6号 テレワーク就業規則について
赤尾事務局長から配布資料に基づいて、就業規則の第1条第2項に「テレワーク就業規則」の新設に伴い、テレワークに関わる文面を挿入すること、それをうけて、テレワーク就業規則に就業規則との関係を載せていることを説明した。

コメント:テレワーク就業規則の新設とその内容の確認は、就業規則の変更に伴い、同様に理事会の承認が必要である。

質問:当規則の内容について、従業員の声は聞いたか、社会保険労務士によるチェックを行ったか、労働基準監督局への提出が必要ではないか、事前審査はしたか。

回答:従業員の意見は取り入れているが、同意されるところまでには至っていないが、社会保険労務士のチェックと、労働基準監督局への事前確認も行うようにする。

その他コメント:標題としてテレワーク就業規則と(在宅勤務規定)との違いや、“この規程”など、表現が統一されていない。配布された資料の中身が協会ではなく、“会社”と表現していたり、第1条と第4条の一部の内容が矛盾している。通信料1日150円について、低いのではないかとという声と、これくらいではないかという意見もあった。

以上、種々の指摘があり、規則全体とその中身を精査したうえで、改めて、再提案することとなった。

議案第7号 監事の指摘事項について

議案第8号 総会での指摘事項について

小野寺専務理事から、上記議案7号、8号共に指摘事項の内容が示されたが、これらについて、担当者を割り当て個別に回答原案作成を依頼する旨の説明があった。

7. 報告

報告第3号 加盟団体振興推進PT進捗状況(中間報告)について

青山理事から、都道府県岳連からのアンケート回収率が100%で、信頼性が担保できる情報が収集できたと説明があり、画面を通じて、その分析結果の報告がされた。

事業規模と、役員と専門委員数(人的規模)、団体数、会員総数の変数を基にし、併せて、山岳、SC、一般管理の事業体ごとに、各岳連の重点がどこに置かれているかの結果が紹介された。

今後の展開として、各岳連が、何に関心や問題意識を持っているかを分析できるようにし、その後、仮説を作成し、来月の理事会で、さらに掘り下げた結果を披露できるようにしたいと説明があった。

亀山副会長からは、人材、資金、制度・規則等の問題が顕在化するが、加盟団体の皆様の支えを基にJMSCAは成り立っていて、ここにくるまで、今PTのメンバーにも大変協力いただいた。これからも、皆様のご協力を、よろしくお願ひしたいと発言があった。

質問:本PTで、何をすべきかを提案していただけるのか。

回答:分析結果から問題点のまとめ、それに対する解決案を提示していきたい。

質問:審判、規則等のルールのどんな部分が不満か、教えてほしい。

回答:個々の規則や、ルール自体の問題ではなく、ルールの内容の理解ができない、わかりにくいということで、不満を感じているようだ。

その他意見:

- ・興味深い結果で、今後のさらなる分析に期待したい。
- ・IFの規則を国内用にルール化している等の対応を去年からはじめた。
- ・三重県、鳥取県は運営が上手なので、人的資源の配分が問題ではないかと理解した。
- ・指標として加盟団体数が重要と認識しているが、団体数が、10-25くらいあると活動しやすくなる。
- ・三角分析について、すべての岳連は、国体の選手派遣のための活動を、行っているはずなので、宮崎県のSCの配分が0というのはおかしいと思う。

・SC強化の観点から、現場のコーチから選手登録の負担が大きいと聞いているが、何が問題かを教えていただけるとありがたい。

・最近ブロック大会をおこなったばかりで、何回も大会を運営してきたが、それでも、国体ルールと国際ルールが併存していて、わかりにくい。規則、選手登録方法を含めて、シンプルにできるとよいのではないかと。

報告第1号 7月度月次報告について

相良常務理事が配布資料を基に説明した。
貸借対照表:大きい動きはない。

正味財産増減計算書:今期になって昨年度承認分の海外奨励金の支払いが発生した(75万円)。予算と実績を比較すると、収入は予算の45%計上となっているが、費用は予算の27%の計上となっている。旅費交通費が、4800万円、昨年在2800万円の実績に対して2000万円多く支出しているが、昨年と比べて海外での競技大会のために選手スタッフを派遣していることが主な原因。

その他報告:村岡常務理事が配布資料を基に説明した。

1. 銚田ユースフューチャーカップ

3日間から2日間(11月12,13日)へ短縮。無観客で、250人くらいを予定。参加費は検討中。

2. IFSワールドカップ 盛岡

現地とIFで実施に向け協議している。日本国内の運営では、大会運営実行委員会を中心となり、ここに、JMSCA(審判、ビレイヤー、ルートセッター)が加わり、協力体制を構築する必要がある。大会が3日にわたり、オリンピックフォーマットとなり、位置づけが変わってきた。他からも注目されてきつつある。経費は、IFSC負担ということだったが、一部経費(旅費等)については、検討が必要になるかもしれない。その際には、理事会に提案、承認を得る。

3. パリオリンピック

東京オリンピックと異なり6日間となり、競技の位置づけが強くなった。

8. その他

事務局の改造を 8月20-21日予定していたが、8月27-28日に延期。8月24日から26日は、事務局の部屋改造準備で、事務所は使えない。

新人役員むけ研修会はいつ頃を予定しているか。10月から11月にかけて実施できるように検討する。

令和4年8月10日 記録 赤尾 浩一

寄贈図書

(一財)日本防火・防災協会	「地域防災」No.45	会報	山と溪谷社	「山と溪谷」No.1056	会報
(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No. 533	会報	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」10月号 No. 904	雑誌
福岡山の会	「せふり」令和4年9月 No.412	会報	(公財)日本スポーツ協会	「Sport Japan」vol. 62	会報
山と溪谷社	「ROCK & SNOW」097 autumn issue sept. 2022	雑誌	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.572	会報
特殊非営利活動法人 日本トレーニング指導者協会「JATI EXPRESS」vol. 90		機関誌	(公財)京都府スポーツ協会	「スポーツ時報」第138号	会報
(株)日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」第2372号、第2373号、第2374号	新聞	Corean Alpine Club	「산(山)」2022年8月号 Vol. 274号	会報
(公社)日本ネパール協会	「会報」2022年秋号 No. 261	会報	東京野歩路会	「山嶺」Vol.100 No.1111	会報
日本山岳協会	「山岳」2022年 Vol.117	会報	(公社)日本山岳会	「山」2022年9月号 No. 928	会報
兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第66号	会報	日本ヒマラヤ協会	「HIMALAYA」No.502	会報
(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」2022年9月 No.391	会報	おいらく山岳会	「山行手帖」No.754	会報

8月号より開始! かすみちゃんのハイキング日記



表紙のこぼ

エベレスト南西壁の軍艦岩(6,900m)からは、左に大中央ガリーを望みながらルートを延ばす。軍艦岩から9ピッチ、ルートを延ばすと、1975年英国隊のC4跡地に着く。ボックス・テントの残骸が見苦しく雪壁にぶら下がっていた。

ここから左に2ピッチ、ルートを延ばして大中央ガリーに入る。大中央ガリーは、氷・岩・雪のミックス壁となり、ロック・バンドからの落石が脅威となる。

大中央ガリーの7,500m地点は、1970年JAC隊のC4跡地であるが、ここは落石の集中砲火を浴びる場所で、キャンプを設営する気にはなれなかった。

(写真撮影 尾形好雄)

トレランJAPAN
一般財団法人 日本トレイルランニング協会

〒141-0031
品川区西五反田6-3-23-205
☎03-3492-0355 FAX 03-6451-3767

編集後記

9月10,11日で、大学山岳部の合宿で奥穂、前穂から岳沢に行ってきました。やっと大学体育会の合宿が解禁になり1年生7人、主将の2年生1人、コーチ3人、合計11人です。食糧は、コロナ禍で各自にしています、中には何と全食、カップラーメンしかもカップ付きです。反省を聞いたら、飽きるそうです。自分で考えたことは危険がない限り反対しないようにしています。自分で分かることが重要なのであえて何も言いません。他に部員は、20人ぐらいいます。登山初心者が多く新しい発見がたくさんあります。楽しんでいます。(蛭田伸一)

登山月報 第643号

定価 110円(送料別)
予約年間 1,300円(送料共)
昭和45年12月12日
第三種郵便物認可
(毎月1回15日発行)

発行日 令和4年10月15日
発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会

電話 03-5843-1631
FAX 03-5843-1635

山岳
雑誌

岳人

がくじん

山と人、時代をつなぐ「岳人」

11月号
発売中

【特集】山の遭難事例に学ぶ

★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中!

毎月15日発売 価格990円(税込)

年間購読がおすすりです

購読割引 送料無料 限定品プレゼント

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常価格12冊

年間購読なら12冊

1冊分
おトク!

10,800円(税込)
11,880円(税込)

9,900円(税込)
10,890円(税込)

岳人 U.L.
ショルダー
バッグ

3色のうち1色をお届け。
※カラーはお選びいただけません。

軽量で丈夫な生地を使用。
登山中のサブバッグに!

限定
デザイン

年間購読特典

岳人カード

全国2,000カ所以上で
ご優待!



全国の温泉や山小屋など提携施設で
さまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから!>>>

<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ
モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組めます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

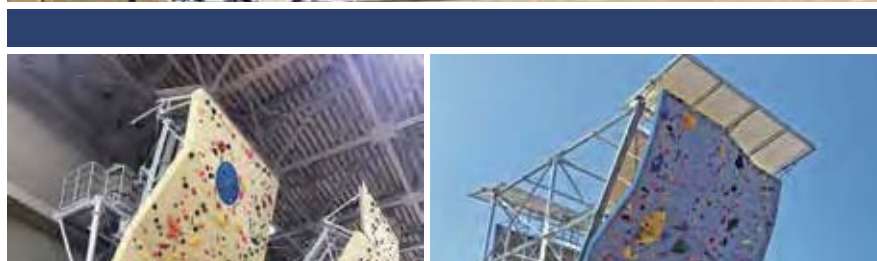
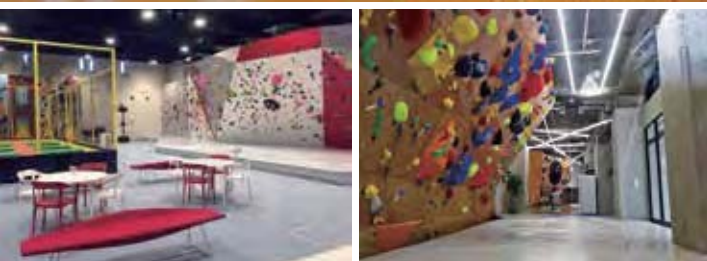
持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
12, 13, 14, 15	- 再生可能エネルギーの普及支援 - 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング	1, 2, 3, 4, 5, 6	- 健康づくりの支援 - 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応	7, 8, 9, 10, 11	- 次世代モビリティ社会への対応 (自動運転車等) - 災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



登山者のマナー 山岳保険

あなたのは山岳保険ですか？

- ☐ 傷害死亡・後遺障害
- ☐ 遭難搜索費用
- ☐ 救援者費用
- ☐ 傷害入院
- ☐ 傷害通院
- ☐ 傷害手術
- ☐ 日常生活賠償

日山協 山岳共済会

〒170-0013東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
<https://sangakukyousai.jp>



「MAMoL マモル」
山を愛する人たちの共済会を～

WEBからお申込みいただけます